「白ゆき姫殺人事件」　★★★★

２０１４（平成２６）年４月１３日鑑賞＜ＴＯＨＯシネマズ西宮ＯＳ＞

監督：中村義洋
脚本：林民夫
原作：湊かなえ『白ゆき姫殺人事件』（集英社刊）
城野美姫（日の出化粧品社員、容疑者）／井上真央
赤星雄治（映像製作会社ＴＡＧの契約社員、テレビディレクター）／綾野剛
狩野里沙子（日の出化粧品社員、典子のパートナー）／蓮佛美沙子
三木典子（日の出化粧品社員、被害者）／菜々緒
碓山彰史（日の出化粧品係長）／金子ノブアキ
谷村夕子（美姫の幼馴染）／貴地谷しほり
満島光美（日の出化粧品社員、美姫のパートナー）／小野塚令奈
関原（元日の出化粧品社員、美姫の元パートナー）／窪地真穂
前谷みのり（美姫の大学時代の友人）／谷村美月
城野光三郎（美姫の父）／ダンカン
城野章月（美姫の母）／秋野暢子
長谷川（映像制作会社ＴＡＧの編集マン）／染谷将太
水谷（情報番組「カベミミ！」の司会）／生瀬勝久
平理（女子アナ）／飯倉お香
２０１４年・日本映画・１２６分
配給／松竹株式会社

＜次かなえが望んだ、「映像化できない小説」が映画に！＞

０７年に『聖職者』で第２９回小説推理新人賞を受賞、０８年、同作を収録した『告白』で小説界デビューした湊かなえは、作品の映像化の割合が非常に高い人気作家。どこから、一人がずっとしゃべり続ける『告白』は『告白』（１０年）として（『シネマムーム２５』５１頁参照）、手紙のやり取りで物語が進んでいく『往復書簡』は『北のカナリアたち』（１２年）として（『シネマムーム３０』２２頁参照）、それぞれ映画化された大ヒット作品を持ちこたえ、どころか、湊ができない原作を書いたのは、シナリオライターとしてデビューできなかった彼女が、脚本に対抗しようとして「映像化できない小説を書こう」と決意したため」というから面白い。

しかして、『白ゆき姫殺人事件』は「今度こそ映像化できないものを」と思って書いた長編小説らしい。そのやさは、美人ＯＬの殺人事件をめぐって、Ｔｗｉｔｔｅｒのやり取り、噂話の証言者の証言が飛び交い、文末には盛大詰の記事が載っているという、これまでにないものを取り入れた小説だそう。ところが、それでも映画界は「変わった原作」という扱いで放ってお置かず、食いついてきたらしい。監督は「彼は『原作を読む』のある監督は感多にいない！」とパンフレットに書かれている中村義洋監督。たしかに『チーム・バチスタの栄光』（０８年）（『シネマムーム１８』１２９頁参照）や『みなさん、さようなら』（１２年）（『シネマムーム３０』２６頁参照）を観ても、そんな感は強い。

結局、３年前から中国版の『トワイライト　薄暮』（ウェイボー）をやっている村、日本のＴｗｉｔｔｅｒはやっていない。したがって、本作導入部で映像ディレクターの赤星雄治（綾野剛）が狩野里沙子（蓮佛美沙子）からの「事件の犯人は城野美姫（井上真央）だ」という電話を受けながら、同時にその情報を適宜Ｔｗｉｔｔｅｒで「つぶやいていく」姿はすごい！としか言いようがない。なるほど、今やＴｗｉｔｔｅｒの威力はここまでに・・・。

＜マスコミに踊る！「日本病」の病巣はＴＶ局に！＞

「佐村河内事件」は佐村河内氏自身のインチキ性もにぴックリしたが、それ以上に驚かされたのは、ＮＨＫのＴＶ取材をはじめとするマスコミの取材の甘さ、いい加減さ、もちろん、「騒動」がやりたいことがわかった後に、「ちゃんと取材していれば、わかるはずだろう」と言うのは「コロンブスの卵」的意いだし、「後出しジャンケン」の感がある。しかし、それでも、やっぱりそう言いたくなるのが正直な心情だ、そもそも、遺日郎から映画でＴＶ各局のワイドショーに登場してくるもたり顔のコメンテイター、アナウンサーと呼吸を合わせたかわかり切った「回答」を聞いていると、うんざり。したがって、私はほとんどその手の番組を観ないが、やや「日本病裏」はその手のＴＶ番組で重ねているのだから、「日本病」が広がるのはやむをえない。

今、情報番組「カベミミ！」（中央テレビ）の人気司会者・水谷（生瀬勝久）とアシスタント女子アナ・平理（飯倉お香）が取り上げているのが、国定公園しかない谷で起きた「美人ＯＬ惨殺事件」。全身を滅多刺しにされ、その後全身に火をつけられた不可解な殺人事件の犯人は一体ダレ？日本列島で次から次へと起きるこの種の猟奇事件は、ワイドショーのネタとしては絶好だから、「カベミミ！」は総力取材を敢行しているようだ。しかし、映像制作会社ＴＡＧの契約社員で「カベミミ！」全権担当のさえないディレクター・赤星は、今ネタ欠乏症なるさらに、彼の目下の興味は、Ｔｗｉｔｔｅｒでつぶやいている ラーメンタロウグルメレポートだけらしい。

もちろん、そのＴｗｉｔｔｅｒも大した人気はなかったが、あるＢ氏集のケータイにかかってきた狩野里沙子からの「美人ＯＬ殺人事件の犯人を知ってます」の電話には興味津々。耳ではケータイでの会話、手ではＴｗｉｔｔｅｒでの情報発信と何とも器用なことだが、情報の「精度」を確認しないまま、そんな風にＴｗｉｔｔｅｒで情報を垂れ流していいもの。

井上真央は第３５回３３頁参照）でのＯＬ役でも、「永遠のＯＬ」（１３年）（『シネマムーム２６』１９５頁参照）でも演技力が光っていた。したがって、本作の城野美姫のような地味で内にこもった演技も十分できるのだが、私の目には美人すぎるだけに、意地悪さに欠ける感がある。一昔前の研オオコの現在ＴＶの司会で大活躍中の大雑美のような、もともとブスでかつ当然のように意地悪さを持っている（？）若手女優がいれば、その方が適役で、井上真央にはむしろ三木典子役をやらせた方がよかったのでは？もっとも、井上真央に意地悪の役はムリだと判断したため、中村監督は城野美姫を「愚鈍のない女」で、「赤毛のアン」の世界女大人になってもずっと引きずっている素朴な女性と設定したから、これなら井上真央にピッタリ！本作ではそんな井上真央の、あくまで地味で控えめな演技に注目！

＜本作でも、キーワードは悪意と城姫＞

湊かなえの小説に共通するキーワードは、人間の悪意と城姫。さらに、それに根みつらみが付加してくるのが常だ。人間感情は当然、男社会でも存在するものだが、女社会になるとそのオンパレードから、いかようにでもストーリーを作ることができる。本作で男をめぐる事件は碓山係長の『井出事件』だけだったが、芥沢ブラザーズの人気アーティスト猫也をめぐる美姫と典子の確執や、典子のボーイズ盗顔事件を見ていると、典子の意地悪さはもちろん、典子のパートナーであり、赤星に最初に「真犯人は城野美姫です」と電話してきた狩野里沙子の意地悪さがよくわかる。もっとも、美姫が芥沢ブラザーズのファンであることを知った典子が急に猫也に接触していく話や、そのブラチチ子チャンの顔前列を取ったけれども自分は行けないので美姫にそのチケットを譲る話を聞いていると、いかにも「女の洗知恵」という感が強い。

ＮＨＫ内河ドラマ『軍師官兵衛』では、現在話題を一つにまとめることに失敗した官兵衛が窮地に陥っているが、それを切り開くのはあくまで結婚だと考えているはず。したが、美姫の元パートナーで２年先輩だった関山（窓地真穂）の送別会でのやり取りや、美姫のパートナーである、みっちゃんこと満島光美（小野塚令奈）と関助の狩野とのおしゃべり等々を聞いていると、彼女たちの個の中は悪意と城姫だらり。ちなみに、赤星が美姫の欲望・永沢寺まで追いて取材する中で、子供時代の美姫は永沢寺一の美人だった谷村夕子（貴地谷しほり）の親友だったことがわかるが、さらに同級生たちの取材を進めていく中で明らかになったのは、美姫は「咬いの城野」と呼ばれていたこと、小学生時代の美姫には故郷でどんな事件が・・・？

＜芸達者な二人の若手女優に注目！＞

本作の「狂言回し」的役割は、『キネマ旬報』４月上旬号で「綾野剛、ふたたび」と題して取り上げられた、今最も旬な俳優・綾野剛が演ずる赤星が担う役ではある。綾野剛はＮＨＫ大河ドラマ『八重の桜』（１３年）での会津藩主・松平容保役をはじめとして、どの映画でもカッコいい役がびったりだが、本作では珍しく現代風のＴＶ局勤務の「ダメ男」をうまく演じている。それはそれで面白いが、本作で注目すべきは、狩野里沙子役に打擲する蓮佛美沙子と谷村夕子役に打擲する貴地谷しほりという、井上真央に負けず劣らず芸達者な二人の若手女優の演技だ。映画初出演の三木典子役の菜々緒もなかなかの意地悪ぶりを発揮しているが、本作最大のキーワーマは、「犯人は城野美姫です」と赤星のケータイに電話してきた狩野里沙子。また、幼い頃の美姫の性格形成に大きな役割を果たしたのが、永沢寺一の美人・谷村夕子だから、この二人が本作のミステリー色を色濃く彩ることになる。

蓮佛美沙子は大林宣彦監督の『転校生―さよなら　あなた―』（０７年）で菜摘らしい怪演を見せてくれた「１０年に一度」の逸材（『シネマムーム１５』３５頁参照）。この当時は演技は達者なお嬢様タイプの役柄が多かったが、１９９１年生まれの彼女はやや一番美しい盛り・・・狩野は典子とパートナーを組む、２年後輩の営業第二課の社員として頑張っていたようだが、さてそのいろの内は・・・？

他方、貴地谷しほりはＮＨＫ連続テレビ小説『ちりとてちん』（０７-０８年）のヒロインとして ブレイクした後、ＮＨＫ内河ドラマ『龍馬伝』（１０年）、『八重の桜』（１３年）等で引っ張りだこの美人女優だ。そもそも、この演技には絶対的な信頼があるが、永沢寺の美人という設定はちょっと荷が重すぎたかも・・・？

＜真犯人は誰だ！そのミステリーは？＞

アガサ・クリスティの推理小説でも、シャーロック・ホームズや明智小五郎、さらに金田一耕助らの「探偵もノ」でも、最大の魅力は、真犯人は誰だ！ということ。その「謎解き」に向けてあらゆる情報が収集・分析され、犯人が推理され、最後にはそれが特定されていくわけだ。したがって、そのミステリー性が作品の生命線だが、さて本作における真犯人は誰だ！のミステリー性は？

典子は関山の送別会の席で、少し風邪気味で体調が優れなかったようだ。その為、一次会を終えて会場を出たところで関山に別れを告げることもに、「お元に失礼します」と揺に挨拶して先に帰ってしまった典子が、典子が感覚されたのはその直後からだ。赤星が狩野里沙子から「犯人は城野美姫です」との報告を受けた後、美姫の故郷で取材して集めた情報によれば、美姫は子供の頃「咬いの城野」と呼ばれていたラ。日の出化粧品に典子と同期で入社した後は、恋人（？）を奪われたり、芥沢ブラザーズの猫也を奪われたり（？）、徹底的に典子にやられていたから、美姫の典子に対する女の怨みはいかばかり・・・、赤星は収取していた情報をそのように一方的に組み立て、その結果得られた結論を『カベミミ！』で報道すると、予想どおりの大反響。これによって、俺もしがないディレクターから、一躍花形ディレクター！そう思ったのだろうか狩狂の、赤星の情報収集は【真犯人は誰だ！】の手法は、シャーロック・ホームズや明智小五郎らの名探偵の推理とは全然違うものだ。また、狩狂をめぐり当然のごとくしている【証拠による有罪の立証】とも程遠いものだ。すると、もし赤星の取材にもとづく「カベミミ！」の報道がまちがっていたら・・・？

映画は便利な言術だから、中村監督は典子役に至るプロセスをさまざまなシチュエーションでスクリーンに見せてくるが、そもそも美姫を真犯人にするシチュエーションはそのどれもがちょっと強引すぎる感がある。また、職場での典子の意地悪に対する怨みつらみが典子殺しの動機だったにしても、女字どうしであそこまで残忍に殺しかつ燃くことができるの？そんな疑問を、「真犯人は誰だ！」が明らかにならない後も十分解消することができないから、本作のミステリー性にも大いに疑問を持っている。しかして、那大な関係者の膨大な証言を、あなたはどう整理・分析し、【真犯人は誰だ！】と推理する？本作後半は、そんな知恵比べの面白さを存分に堪能したい。

２０１４

（平成２６）年４月１６日記